

伝統ミサによる日曜日の歌ミサ参列の手引き

ミサの意味と伝統ミサ参列での心構え



ミサは十字架上のいけにえが永続する記念であると同時に、キリストのからだに血にあずかる聖なる会食です。伝統ミサでは全員が神に向かって同じ方向を向き、礼拝します。司祭はキリストの代わりにミサを司式し、参列者は神に感謝と賛美を捧げて参加します。

グレゴリオ聖歌とミサでの受け答え



伝統ミサではグレゴリオ聖歌を歌います。歌詞は主に聖書の章句が使用されています。参列者は聖歌隊が歌う聖歌を聴きながら黙想をしますが、歌うこともできます。

また参列者を代表して侍者（司祭の手伝いをする奉仕者）がミサ中の受け答えをしますが、「Amen（そうなれかし）」など大声で唱える時、参列者も唱えることができます。

1 司祭と侍者の入堂行列



ベルが鳴ると参列者は起立します。Ave Mariaなどの聖歌が歌われる中、司祭と侍者は祭壇に向かって進みます。



2 灌水式

Asperges me（復活節は Vidi aquam）が歌われる中、司祭が聖水で小罪を洗い清めるため、参列者に聖水を振りかける儀式が行われます。



司祭は祭壇に向かって小声で最後の祈りを唱えた後、参列者のために祝福をします。参列者はひざまずき十字を切り、起立します。

8 最後の福音書朗読



ミサ後の感謝の行いとして、司祭は祭壇左側でヨハネ福音書の序文を唱えます。朗読後半の「Et Verbum caro factum est（御言葉は肉体となり）」の箇所では片膝をつき、起立します。



9 司祭と侍者の退堂行列

季節の聖母賛歌などが歌われる中、司祭と侍者は祭壇を離れて進みます。これは信者が世に派遣（Missio）されたことを象徴しています。

掲載写真は全て無断転載禁止

伝統ミサで使用させていただいている各教会の事務担当者はスケジュールなど詳細を答えることができないので、お問い合わせはUna Voce Japanまでお願いします。スケジュール等の通知を希望される方はメーリングリストに登録下さい。

お問い合わせ用QR



メーリングリスト登録用QR



“典礼史には、成長や発展はあっても、決して断絶はありません。過去の人々にとって神聖だったものは、わたしたちにとっても神聖であり、偉大なものであり続けます。”（教皇ベネディクト十六世）

7 聖体拝領の部

司祭は救い主自身が私達に教えた主の祈りを歌います。参列者は「Sed libera nos a malo（悪より救い給え）」の部分だけを歌います。次いで、司祭は小声で平和を求める祈りを行い、「Per omnia saecula saeculorum」と唱えます。次いで「Pax Domini sit semper vobiscum（主の平和がいつもあなたがたとともに）」と唱え、聖体をさきます。アニユス・デイ（Agnus Dei）が歌われます。この歌はキリストが私達の罪があがなうために送られた真の子羊であることを宣言し、神の憐れみと平安を求めます。歌い終わったら参列者はひざまずきます。



聖体拝領とは聖体に現存されるキリストいただき、キリストと一致する（Communio、交わり）ことです。司祭は祭壇中央で頭を下げて聖体拝領のための三つの祈りを小声で唱えます。参列者も平和と教会の一致のために祈ります。まず司祭が聖体と御血を拝領した後、参列者に向かって聖体を示しながら「Ecce Agnus Dei（みよ、神の子羊）」を唱えるので、ふさわしい心で聖体を拝領できるよう謙遜さを祈り求めましょう。

聖体拝領唱（Communio）が歌われる中、カトリック信者で聖体拝領する



方は行列を作り、内陣前で横一列にひざまずいて並びます。伝統ミサでは聖体は舌の上で受けます。口を大きく開き、舌を下唇に軽くのせるようにすると拝領しやすいです。また聖体拝領時に、拝領者は「Amen」と唱えません。

席に戻れば着席できます。

聖体拝領が終わり、司祭がカリスの浄めを終えると、参列者に向かい「Dominus vobiscum」と唱えるので、参列者は起立します。司祭は祭壇右側で聖体拝領後の祈りを唱え、祭壇中央に移動し、再度「Dominus vobiscum」と唱えた後に「Ite missa est（行け、ミサは終わった）」と歌い、侍者は「Deo gratias」と歌い答え、ミサは終わります。

3 ミサの準備の祈り



入祭文 (Introitus) (注) が歌われる中、祭壇の下で、司祭と侍者はミサの準備の祈りを交互に唱えます。参列者は起立したまま、心の中で自分の罪を告白し、司祭と共に準備をします。

注 紫の箇所は固有唱パンフレットにラテン語原文と日本語訳を掲載

4 ミサ前の部



神の憐れみを求める聖歌、キリエ (Kyrie) が歌われます。参列者の姿勢は起立のままです。祭壇の階段を昇った司祭は祭壇へ香炉をふり、私達の祈りが香の煙と共に神に届くように祈ります。

キリエが歌い終わると、司祭は祭壇中央で「Gloria in excelsis Deo (いと高き天においては、神に栄光あれ)」と歌い出し、グロリア (Gloria) が歌われます。グロリアは神の偉大さと栄光を称える聖歌です。司祭が歌の途中で座った場合は着席します。なお、グロリアは悔い改めの季節 (例、四旬節) では省かれます。

グロリアの歌が終わると、参列者は起立します。司祭が参列者の方を向いて、「Dominus vobiscum (主はあなたたちと



ともに)」と唱え、侍者は「Et cum spiritu tuo (またあなたの霊と共に)」と答えます。司祭はミサ典書 (ミサで使用する祈りや聖書朗読箇所を記した本) に向かい、「Oremus (祈りましょう)」

と呼びかけ、集祷文を祈ります。これは教会全体の祈りで、侍者は集祷文の結びで「Amen」と答えます。

司祭は同じ位置で、ミサ典書に向かって聖書朗読を始めますので、参列者は着席します。朗読の終わりに侍者が「Deo gratias (神に感謝)」と唱えます。伝統ミサでは聖書朗読の回

数は原則2回 (この箇所と聖福音) です。

聖書朗読が終わると、昇階唱 (Graduale) とアレルヤ唱 (Alleluia) という聖歌が歌われます (季節により詠唱 (Tractus) や続唱 (Sequentia) という聖歌も歌われます)。聖歌の終わりが近づくと司祭は祭壇に戻り、香炉を準備し、祭壇中央で聖福音をふわしく朗読できるよう祈ります。



司祭が祭壇左側でミサ典書に向かい、「Dominus vobiscum」と唱えてから、参列者は起立します。司祭はミサ典書に向かって聖福音を朗読します。福音書はキリスト自身の言葉と行いを直接伝えています。聖福音の朗読が終わると、司祭は説教壇に移動し、説教を行います。参列者は着席します。

説教が終わると、参列者は起立します。司祭は祭壇中央に戻り、「Credo in unum Deum (私は唯一の神を信じる)」と歌い出し、信仰宣言クレド (Credo) が歌われます。キリストの御言葉への心からの承諾がクレドです。聖歌が「Et incarnatus est (受肉し給うた)」を歌う箇所でひざまずきます。司祭が歌の途中で座る場合は着席します。

5 奉献の部

クレドが歌い終わると、司祭は参列者に向かって「Dominus vobiscum」と唱え、次に「Oremus」と呼びかけます。ベルが鳴ると、奉献文 (Offertorium) の歌が始まります。参列者は着席します。司祭はパンとぶどう酒を神に捧げる奉献の祈りを小声で唱えます。小声での祈りは、神秘的な部分に特別な敬意と畏敬を示す目的や、司祭が全教会のために自分の奉仕に集中する目的があります。参列者は沈黙の中で祈り、自分自身の生活や日々の行いを神に捧げ、ミサの犠牲が神に受け入れられ、私達の祈りが神の前に届くことを願います。



司祭は祭壇に再び香炉を振ります。侍者が参列者に香炉を振るので、起立し頭を下げます。終わると着席ください。

奉献の部の終わりで、司祭は参列者の方を向いて「Orate, fratres (祈れ、兄弟たちよ)」と唱え、侍者は捧げものを神が受け入れて下さるよう祈ります。次いで司祭は密唱を小声で唱えます。密唱はささげものへの最後の祈りです。司祭は結びに「Per omnia saecula saeculorum (世々に至るまで)」と大声で唱えると、侍者は「Amen」と唱えて起立します。

司祭は祭壇中央で侍者と交互に祈りを唱えた後、序唱を大声で唱えます。司祭は私達が深い敬虔をもって、天使と一致して、聖体をささげうるようにと祈ります。次いで、ベルが鳴る中、サンクトゥス (Sanctus) が歌われます。歌が終わったら参列者はひざまずきます。

6 ミサのカノン (典文) と聖変化



ミサのカノンは感謝と聖別の祈りで、聖変化 (パンとぶどう酒がキリストの体と血に変わる) で頂点に達します。司祭はすべての祈りを小声で唱えます。司祭はパンとカリスを高く挙げ、参列者はそれを仰ぎ見て礼拝します。参列者は沈黙の中で深い敬虔さと畏敬の念を持って神秘を見守り、私達に赦しと慈しみが注がれたことを感謝します。また教会全体の一人として、全ての人のために祈ります。



司祭はカノンの最後にキリストによって・とと

もに・のうちに、捧げられたことを記念します。ベルが鳴り、「Per omnia saecula saeculorum」と司祭が大声で唱えると、侍者は「Amen」と唱えて起立します。